

心・体・暮らしに寄り添う クリニック 名古屋ちくさヒルズ通信 NO.41

昨年から急激に増えているんです 身近に潜む危険な病気が

2024年7月号

それが、「劇症型溶血性レンサ球菌感染症」、いわゆる「劇症型溶連菌感染症」といいますが、この感染症について皆さんはどれだけ知ってみえるでしょうか？

一般的な溶連菌感染症とは異なって、30歳以上で発症が多く見られますが、劇症型だけに、常に重篤な症状を引き起こす可能性があって、急激に悪化することと、罹ってしまうと何と30%を超える高い致死率が特徴なのです。

私たちが普段耳にする溶連菌感染症とは、ほとんどの場合子どもが発熱や咽頭炎、皮膚の発疹を伴う軽度のものなのです。これらは比較的容易に治療が可能であり、数日で回復することが多いのです。

しかし、劇症型溶連菌はこれとは異なって、筋肉や血液、肺といった通常は細菌が存在しないような臓器に侵入をして、重篤な症状を引き起こす厄介な感染症なのです。

特に30歳以上の患者さんが多く、多臓器不全や壊死性筋膜炎、そしてさらには生命を脅かすショック症状を招くこともあります。このため、溶連菌は「人食いバクテリア」とも呼ばれているのです。

初期症状は風邪に似ているだけに

劇症型溶連菌の初期症状は、一見すると普通の風邪と似ており、咽頭痛や発熱、全身の倦怠感が主な症状として現れるものです。

しかし、急に消化器症状へと進んで、食欲不振、吐き気、下痢などが現れることがあり、更に進行すると低血圧や筋肉痛が加わって、これが敗血症の警告信号となり得るのです。

これらの症状は特に、病院での診断が困難なほど急激に進行することがありますから、早期の識別と迅速な対応が求められる厄介者なのです。

この感染症の恐ろしいところは、一度重篤な症状が現れますと、急速に体の局所が腫れ上がり、赤くなり、痛みを伴うことです。

これが手足の壊死へと進行して、最終的には多臓器不全やショック症状を引き起こすことになるのです。まさに「人食いバクテリア」と呼ばれる所以でもあります。

そのため、最初の症状が現れた際には、すぐに医療機関での診断を受けることが極めて重要です。自己判断で軽く考えることが無いようにしてください。



当クリニック
林祐司院長

「最悪を想定し最善の策を打つ」と言う格言通り、劇症型溶連菌は、一般に知られている感染症とは一線を画しています。初期症状が風邪に似ているため見過ごされがちですが、私たち一人ひとりがこの感染症について正しく理解し、不審な症状を感じたら迅速に行動することが、命を守るための第一歩です。この5月にはNHK-TVの「クローズアップ現代」でも取り上げており、国や自治体も注意を呼び掛けています。

**とにかく初期症状を感じたら、すぐに来院してください。
命は自分で守るのです！**

これから先、健康な“骨”を保つために もう少し「骨」のことを知りましょう！ まだ間に合いますよ！骨を強くすることは！



当クリニック整形外科医師
岩田 久 先生

人は様々な形をした全体で200個を超す骨が組み合わさって形づくられ、それぞれに支えられているんですよ。
そして骨は日常的に「壊す」、「作る」を繰り返しながら1年間にほぼ10%程度の骨が入れ替わっているのです。

さて、まずは骨はどんな働きをしているのか、わかっているようで知らないことが多いと思います。骨はその硬さによって体を支えているのです。そして、骨は内部の臓器を色々な衝撃から守る役目も持っています。分かりやすいのが頭蓋骨や肋骨、骨盤などこれが弱かったら日常生活も危険で安心して動けませんね。更には、筋肉の収縮によって関節が動く際の「テコ」の役割を持っていたり、カルシウムを蓄えて必要に応じて血液中にカルシウムを出したり、骨髄では赤血球・白血球や血小板などの血液成分をつくる役目を持っていたり、ホルモンの一部を産生・分泌するなど、大切な役目を持っているんですよ。

そんな骨は一体どんな構造をしているかですが、骨はサブリなどのCMでよく耳にするコラーゲンという線維状のたんぱく質にカルシウム、リン、マグネシウムなどのミネラルが沈着して形成されて、硬さとともに強靭さとしなやかさを兼ね備えている優れたものなのです。背骨とか手や足の長い骨、これを長管骨と言いますが、その両端の内部は海綿骨と言って網目状の骨になっており、骨の表面や骨の真ん中は皮質骨と言う、みっちり詰まった硬い骨になっているんですよ。

そして、骨が維持される仕組みは一体どんな仕組みになっているのかと言いますと、もともと骨は新陳代謝が活発な組織ですから、古くなった骨は「破骨細胞」と言う細胞によって壊されて、壊された部分(小さなくぼみのようなもの)に骨芽細胞が張り付いて新しい骨が形成されていくのです。このように骨を壊す働きを「骨吸収」と呼び、骨を作る働きを「骨形成」と呼んでいます。この骨吸収と骨形成のバランスがたもたれることで骨の健康が維持されると言う仕組みになっているのです。

骨の構造や、仕組、その働き、また維持される仕組みなどお分かりいただけましたか？骨は冒頭に述べた通り、壊す・作るを繰り返して一年間で10%の骨が入れ替わることが研究の結果からもわかっています。そして生涯にわたって骨量は大きく変動もしていくのです。例えば、女性の一生で骨量が減りやすい時期はいつごろか、その理由は何か？、骨量が減るとどんなことが起こるのか、それをどう察知して、どう対処していったらよいのか、次号ではこの続きをわかりやすくお話していきます。

今、すでに骨にご心配のある方は、次号まで待たずにご来院ください。「早いに越したことなし！」

健康の知恵袋



以前、この通信で先生より「ロコモティブシンドローム」のお話を分かりやすく頂きましたが、今でもロコモが進行しないように、歳に負けないような中程度の運動を心がけ、健康な骨づくりを心がけています。

広報紙 「クリニック名古屋ちくさヒルズ通信」
発行 医療法人財団榎橋会 クリニック名古屋ちくさヒルズ
〒464-0858 名古屋市千種区千種2-24-2
千種タワーヒルズ1F

ご意見はこちらまで info@clinic-chikusahills.com
編集・発行 医療法人財団榎橋会 クリニック名古屋ちくさヒルズ
編集委員会(原稿責任者 川島和信)

発行日 毎月10日